

平成18年度卒業論文 要旨

伊田 智史

「京田辺市の地域一体型を目指したハンドボール競技に関する一考察」

卒論では、私が住んでいる京田辺市でなぜハンドボールが盛んなのかを研究し、「競技スポーツ」としてではなく、「生涯スポーツ」「地域スポーツ」として考え京田辺市民としてコミュニティスポーツの将来像を提言した。まず第一章では、ハンドボールの歴史と特性を、参考文献を使い調べた。第二章では京田辺市の特徴と普及状況を京田辺市の市役所に行き話を聞かせていただいた。第三章ではアンケート調査を通じ京田辺市の小学校、中学校(ハンドボールクラブ)の現状を調べた。第四章では、アンケート調査と第二章で調べた普及状況をもとに課題をあげた。

この研究で、まだまだ京田辺市はハンドボールが盛んになると思った。市民のハンドボールに対する意識が高いということに驚いた。もっと学校側がハンドボールに対する意識を高めてほしいと感じた。これから発展・普及のモデル都市としての京田辺市であってほしい。その願いを結びの言葉にかえたい。

(指導教員：井戸)

岩城 優子

「フリースクール - 一つのフリースクールを例に - 」

今日、日本の教育制度においては就学の義務を原則とし、不登校をなかなか受け入れることの出来ない世の中である。不登校の子どもや学校に行けないもしくは行っていないという事実だけを見るのではなく、理由と背景を理解することが大切であり、子どもとどう関わっていくべきなのかということが本研究の問題意識である。不登校に陥った際に必要なことは心のケアであるが、不登校に陥ると人と関わる機会が少なくなりその際フリースクールなどは重要な場として捉えられる。ではフリースクールはどういった場であるか。フリースクールではボランティアの方など学校ではなかなか触れ合う機会のない様々な年代の人と触れ合うことが出来るが、逆に閉鎖された場所であり守られた空間である。また研究成果として不登校に陥る原因として子ども自身だけではなく親や社会が深く関わっているのではないのかということから、不登校は社会のひずみから起こるものでありだからこそ周りが支援していかなければならない、ということ述べた。

(指導教員：今西)

岩崎 和世

「現代における若者の「居場所」の研究」

いま、子どもたちや若者の深刻な問題として、さまざまな場面で「居場所がない」というフレーズが繰り返して使われている。家や学校など自分がいる「場所」はあっても、その「場所」が居心地のいい、自分の存在を確認できる「居場所」なのかどうかを確認できずに、不安になっている人が多くいる。安心するためには、自分の存在を確認できる場や、自分を受け入れてくれる場である「居場所」をみつけなくてはならないということが、これからの大きな課題と考えられる。

「居場所」において、他者とのつながり、つまり人間関係も大変必要になってくる。そして、人との関わりの中で他者の意見も受け止めることができるようになり、自分と重ね合わせることで共感がわいて、「居場所」における信頼関係が深められる。

「居場所」という空間を、若者自らがみつけていくことのできる心の成長や、社会が受け入れる体制を、これからも考えていきたい。

(指導教員：井戸)

植松 寛晶

「日本酒文化と地域振興」

今回卒業論文の題目として「日本酒文化と地域振興」を取り上げ、西宮市の日本酒文化と地域の振興の関係を歴史や文化などさまざまな視点から研究し、また若者のもつ意識をアンケート調査して、今後の西宮の地域振興に日本酒文化がどのように関わっていくべきなのかを考察していった。アンケート調査の結果、若者の日本酒離れが日本酒文化にとって深刻な問題ということがわかった。そこで若者の日本酒離れを解決する方法を考察していった。若者の日本酒離れを解決する方法として、刷り込まれたマイナスイメージを払拭する方法と、西宮の地域振興を考えて、酒文化を活用した地域の活性化案を考察した。具体的には、メディアを利用したイメージの改善や、日本酒文化を観光資源として考えた活性化案である。結論としては今までの硬かった日本酒のイメージや文化、伝統を一掃して、新しい日本酒像をこれから作っていくというのも、これからの西宮が進んでいく一つの道であると考えたが、やはり、地域と文化と若者が十字に組んで協力し合い、歴史と伝統を守りつつも、時代の変化を認めながら、そのまちを活かしていくことこそが地域の活性化であると結論を出した。

(指導教員：岡田)

岡 聡子

「在留外国人と日本語教育 - 天理大学留学生を中心に - 」

近年、日本にやってくる外国人の数が増加し、留学生の受け入れにも力を入れ、留学生数も年々増加の一途をたどっている。その中で、受け入ればかりで、留学生は十分な学習の機会があるのか疑問に思い、天理大学留学生に焦点をあてて研究した。

第1章では、留学生の動向や受け入れの現状を述べた。

第2章では、在留外国人の日本語教育の状況や問題点を述べた。

第3章では、天理大学の日本語コースの事、天理大学留学生にインタビューを行った。インタビューを行い、留学生が実際どんな事を思っているのかがわかった。

第4章の結論では、留学生のインタビューを通して、まだまだ日本語を十分に学べていないと思っている学生が多く、日本語を話せるようになるには、日本人との交流が大きく関わってくることがわかり、また、生活面や精神面での支援、将来に備えた日本語教育など、多面からの支援が今後必要であることがわかった。

今後、学習をしたいと思う留学生が十分に学べる学習機会が必要であり、私自身も、もっと積極的に交流していかなければならないと感じた。

(指導教員：岡田)

神 貴人

「生涯スポーツとしての少林寺拳法」

少林寺拳法の開祖は、世界の平和に貢献できる思想教育を行うために、自らが若き日に打ち込むことの出来た護身の技術を教えながら人を集めた。だが、私はその思想に最初から共鳴したのではなく、ただ強くなりたくて、友達に誘われたから、そんな理由で始めた拳法をもう10年近く続けている。

学校教育を16年受けてきたが、自分の心のよりどころは、少林寺だった。社会人になってからも、定年退職してからも、続けていこうと思っているし、続けていける環境がある。これは、自分の専攻である生涯教育そのものであると思い、卒論テーマとして選ばせていただいた。

2章で文献を主な参考にした表向きの少林寺拳法、3章で体験と聞き込みを主にした実態の少林寺拳法、4章で考察を述べた。

物事を長く続けるには、人間関係が必須の条件である。相手のからだに直接触れ、技をお互い掛け合う拳法は、コミュニケーションをはかりやすく良い人間関係を築きやすい。また、技も思想を学べるので生涯スポーツとした魅力的だと考える。

(指導教員：石飛)

高木 政幸

「シュルレアリスムと児童絵画」

本研究は、20 世紀の芸術運動の 1 つであるシュルレアリスムと、子どもが描く絵の関係性、そして想像力に対して考察することを目的とする。自由奔放なエネルギーに満ちた子どもの描く絵は「想像力に溢れている」と言われることがある。しかし想像力による創造活動は、人間の過去体験がどれだけ豊富で多様であるかに直接依存している。よって大人に比べて過去経験に乏しい子どもの想像力は非常に貧弱であるといえる。では想像力に乏しい子どもが自由な絵を描ける理由とは何か。それには、幼少期の特徴である以下の 3 点、理性の未発達、子どもの発達過程の描画の変遷、遊びにおける溶解体験を挙げることができる。

シュルレアリスムはアンドレ・ブルトンを指導者に、夢や無意識の世界に着目して理性による制御のない人間の精神の全的開放と合理主義への反抗を唱えた芸術運動である。シュルレアリストたちが様々な方法を用いて試みたことは、能動的思考による想像力を駆使して子どものように理性に行使されることを拒否するための手段であり、シュルレアリスムの目指す超現実の世界を現存在として体現しているのは子どもであるといえる。

(指導教員：石飛)

高橋 雄一郎

「障害児教育の変革 - 特別支援教育の理念とその行方 - 」

私の研究動機は教職課程の授業の中でこのテーマに深く関心を持ったことである。本稿は、特殊教育から特別支援教育への移行の中で、特別支援教育がどういう方向にあるべきか明らかにすることを目的としている。そのため、特殊教育と特別支援教育を照らし合わせ、また特別支援教育コーディネーターの方の実際の声をインタビューした。その結果、平成 19 年度施行を前にその現状と課題が明らかになった。現状は各学校と地域や専門機関との連携が進み、今まで障害児教育の一担任に委ねられていた多くの部分が学校全体の努力に変わっていった一方、その体制には学校よっての差があり、コーディネーターや教職員全体の専門性にも問題が存在した。そこでこれから抱える課題としては、施設のバリアフリー化などの学校の支援環境の整備と、教職員全ての特別なニーズを持つ子への教師個人の理解力と指導力、そして親と学校がパートナーシップを持って子どもを育てるための保護者の理解があげられる。

(指導教員：岡田)

中井川 祐太

「子どもとスポーツの出会い - スポーツとのより良い関係を目指すJリーグの試み - 」

本研究では、Jリーグの活動である「Jリーグ・アカデミー」を参考にし、子どものスポーツはどうあるべきなのかということを考察した。

子どものスポーツは、子どもを主体して行うべきなのだが、現代では大人中心で主に行われている。そもそも、日本のスポーツは、時代背景により欧米のスポーツとは異なる発展を遂げ、日本独特のスポーツ観を持ってしまい、楽しむということよりも教育などの要素が色濃くなってしまい、純粋にスポーツを行えないという問題点があった。しかし、Jリーグでは、スポーツ(サッカー)を純粋に楽しむということを第一に考え活動を行っている。そして、その中で京都パープルサンガでは、子どもとスポーツの出会いの場を増やす為、様々な活動を積極的に行っているのである。これは、今まで学校で主に発展してきたスポーツが新たな発展の場を見出し、スポーツ本来のあるべき姿に変わる一歩なのではないか。Jリーグがきっかけとなり、様々なスポーツに関わる人々の意識が変わり、幅広いスポーツを楽しめる環境づくりが重要なのではないだろうか。

(指導教員：岡田)

中 拓己

「学生ボランティアの現状と課題について - 大阪府と奈良県の事例をもとにして - 」

学生ボランティアには人間形成にとって必要な要素が多く含まれていると思う。しかし、このようなボランティアは社会的な認識・情勢の変化に伴い減少している。そこで本研究は学生ボランティアがどのような課題を抱えてこれからどのように変化していけばいいのかを目的として取り組んだ。

近年の学生ボランティアの減少には、その原因として次の3点、少子化による学生の減少、学生に対するボランティアが有する魅力の減少、ボランティアを保持、継続する予算の減少が挙げられる。これらの問題を解決するためには様々な機関が協力・提携することが欠かせない。また、過去にとらわれず新しい取り組みを行うべきだろう。そうすることによってボランティア活動はより大きな影響力を持ち、今以上の教育力や様々な体験を学生にもたらしてくれるだろう。

(指導教員：井戸)

中山 愛美

「持続可能な開発のための教育」における環境領域の研究

天理教自然観との関連について

本研究は「持続可能な開発のための教育(ESD)」における環境領域に着目した概念の研究・整理を行うことを目的とし、文献を中心に考察を進めた。

2005年よりスタートした「国連・持続可能な開発のための教育の10年(UNDESD)」は、地球規模で問題視されている様々な課題を解決していく力を育み、「持続可能な社会」を実現しようという取り組みである。国内でのESDに対する認知度はまだ十分とは言えないが、本来日本人が持っている自然観が「環境の世紀」を考える上で世界に注目されていることを視野にいれつつ、これからの環境問題解決に必要な宗教性の役割を考察した。さらに、これまでの価値観やライフスタイルを転換していく上での道しるべ的存在として天理教をあげ、その教えをもとに「共生」を目指す「持続可能な社会」に向けた考え方について提示した。

(指導教員：今西)

永田 隆世史

「キャリア教育を通してみるフリーター・ニート問題について」

近年社会問題の一つとして注目を浴びるフリーター・ニート問題。この問題が起ころうる要因の一つに勤労感の欠如が考えられる。私はその解決策として学校教育の中でのキャリア教育の必要性を本研究で訴えている。現在実際奈良県で行われているキャリア教育プランを参考に、キャリア教育の優れた点や今後の課題を考察する。

また、「おおさか若者自立塾」にてインタビュー調査を行い、フリーター・ニートの共通点・国や学校の問題点・今後の課題等について調べている。また、フリーター・ニートの現状や意外と曖昧な定義についても冒頭で詳しく調べている。本研究を通して“働くということ”について今一度考えてもらいたいというのが今回の私の狙いである。

(指導教員：井戸)

丹羽 紀輔

「生涯スポーツと空手道 - 人の成長を促進させる「空手」の学び - 」

本研究は、「空手」と「生涯スポーツ」について研究を進めてきた。私は自分自身大きく成長させてくれた空手道に興味がわき、人が空手道を通して心身共にどのように成長するか、調べたいと思ったからである。また空手での社会貢献をすることが、自分自身にとっても勉強となることに注目し、私は生涯スポーツとしての空手が人にどのように影響を与えているのか、文献研究と、調査資料をもとに研究を進めてきた。

そして私が、研究を終わらせるにつれて思った事は、生涯スポーツはその人のやる気が持てる環境が整い、また、誰もがいつでもどこでも気軽に参加できる生涯スポーツ社会の実現に向けた諸条件の整備が求められている中で、空手道をする人達にスポーツをする楽しさを自ら理解してもらい、その中で大切な空手道精神を学ばせていくことにより、生涯スポーツとしての空手道が、老若男女を問わず普及していくのではないかと、ということである。

(指導教員：今西)

服部 樹里

「家庭における宗教心の涵養についての一考察 - 天理教を事例として - 」

豊かな人間性をはぐくむ心の教育が叫ばれるようになり、子育てにおける家庭での親の役割は大変重要になっている。そこで、天理教を事例とし、信仰している人を対象としたアンケート調査を中心に、家庭や宗教心の涵養について、どのような考えを持っているのかを考察することにした。

第一章では、日本人の信仰における特徴として、「特定の宗教の信仰はもっていないが、日常的に宗教的な行動をすることは多く、宗教心は大切だとおもっている」ということがわかった。第二章では、「少子化」「親になりきれない親」「シングル世帯の増加」という問題から、現代の家庭では豊かな心を育ていけるような環境がないのではないかと考えた。第三章のアンケート結果からは、天理教を信仰している人の家庭に対する考えが読み取れた。

親が家庭での日々の生活で、宗教的な心をもち、子どもと共に行動をし、親自身も成長することが重要だといえるのではないかと。

(指導教員：井戸)

日方 晃司

「生涯スポーツとしてのラグビーによる人々の成長」

本研究では、大学で学んだ生涯教育の中でも生涯スポーツに注目し、そのなかでもラグビーについて書こうと思った。理由は、私自身が中学生のときからラグビーを始め、高校・大学とラグビーをしてきたので一番身近で興味のあるスポーツだからである。また、生涯スポーツの定義である「だれでも・いつでも・どこでも」ということが含まれていると思ったため、文献研究を中心に進めた。

この論文を書くことで生涯スポーツの歴史などあまり知らなかった事や、ラグビーがどのようにして日本で普及したのかがわかった。また、自分は今まで何気なくラグビーをしてきたが、生涯スポーツと関連させていくことによりいろいろな効果があることがわかった。これからの社会でラグビーだけではなく多くの種類のスポーツが生涯スポーツとして普及していくことが大切だと感じた。

(指導教員：今西)

樋口 瑞恵

「生涯教育とミュージカル - 生涯学習としてのミュージカル活動の有用性 - 」

本論文では、ミュージカル活動が「誰でも・どこでも・いつでも」と言われる生涯学習に対して大変有効な活動になりうるのではないだろうかという仮説をたて、研究を進めていった。

まず、アメリカにおけるミュージカルの成り立ちと日本のミュージカルの現状を調査した。それとともに、子どもや中高年を中心としたミュージカル団体の取材を重ね、ミュージカルならではの学ぶ喜びを探求した。特に、生涯教育としての可能性を鑑み、山の辺ミュージカルの会という天理市のミュージカル団体に密着取材し、ミュージカルの有用性と今後の発展の可能性について考察した。

その結果、生涯学習としてのミュージカル活動は、人間関係の構築、自己表現の獲得、感動体験の共有などという点において、大変有効であることがわかった。しかしその一方で、「ミュージカルを見たことがない」という人が圧倒的に多く、生涯教育としてのミュージカル活動を広く普及させるためには、ミュージカルに接する機会を増やすことが肝要であることがわかった。特に、山の辺ミュージカルの会のような「自分のふるさとを語り継ぐミュージカル」に積極的に取り組むことは、市民レベルでのミュージカルファンの増加につながり、生涯教育としてのミュージカルにおいて大きな可能性があるといえる。

(指導教員：石飛)

町野 彩

「社会の変化に対する親子関係の変化 - 親の意識改革につながる学習過程について -」

本研究は親の意識改革につながる学習過程についての研究の一環として、今日の親子間における問題を取り上げ、これからの親に求められる教育と、親子間におけるコミュニケーションの重要性を見直すことを研究目的とした。

また、今日では「『人間関係力』の基盤となる家庭でのコミュニケーションが希薄になっている」のではないかという仮説を立て、2校の中学校の1、2年生の生徒に対しアンケートを依頼し、結果データから親子間でのコミュニケーションについて考察した。その際、子どもの自尊感情を育てる親がしっかりと自尊感情を持つことが重要であることを提示した。

親が親としての自覚を持ち、「親としての自己実現」できるか否かで、親子間でのコミュニケーションや子どもに対するしつけに大きく影響が現れることから、これからの親子関係を考えるうえで、親の自尊感情の有無や親子間のコミュニケーションの質を見直していく必要性があると感じた。

(指導教員：今西)

松村 晴代

「旅 - 現代青年の旅行事情 -」

旅行は今や我が国の消費動向や、景気動向を見極める重要な要素のひとつになっている。ゴールデンウィークや年末年始などに、旅行者が国内、海外を問わずどれだけでかけていったかなど、旅行についての関心が高まってきている。では、なぜ人々は旅行に行くのか、どのような影響を与えるのだろうか。

学生を対象にアンケート調査を行った結果、現代の若者の旅行への関心は高いということがわかった。また、現代の若者の旅行観は、旅行とは日常生活とは違った特別な時間や空間だ、というものであり、活動的で自由きままな思い出志向の強いものだということがわかった。つまり、現代の若者は日常生活から離れて「癒し」や「安らぎ」を求めているのではなく、日常生活から離れて「楽しさ」や「満足感」を求めているのではないだろうか。そして、そこに自分の目的を見つけ、今後、旅行は余暇活動としての有効活用、成人教育や高齢者教育の一貫として活用されることとなるだろう。

(指導教員：岡田)

松本 克哉

「なぜ高校でバイクが禁止されるのか」

ほとんどの高校では校則でバイクに乗ることを校則で禁じている。なぜ、法律では禁じられていないにもかかわらず、高校ではバイクに乗ることが禁じられるのか。この矛盾について、校則とはいったいどのようなものなのか、今まで行われた校則裁判、バイク禁止にいたった理由について調べた。また、実際の現場ではどのような扱いになっているかを、ある高校教諭から聞き取り調査を行った。

校則とは、学校の教育目的を達成するためであれば、必要かつ合理的な範囲内において制定し、自動・生徒の行動等に一定の制限を加えることが出来き、「校則」は児童・生徒が守るべき決まりのことであり、学校に備えるべき表簿である「学則」の一種という位置づけになっている。

校則に対して異議申し立てがなされることも少なくなく、校則の合憲性、合法性が問われているが、ほぼすべての校則裁判において、違憲性、違法性は認められず、原告の訴えは退けられることが多い。

50年代になって、高校生の暴走族加入が社会問題化し、愛知県教育委員会が、昭和45年に激増する高校生のバイク事故を防ごうと呼びかけた三不運動を実施する県が増えた。

聞き取り調査でわかった事は、バイク禁止の校則に違反した際、自宅謹慎などの処分は一律絶対的なものでなということ、また、責任問題を回避するためにバイク禁止の校則が制定されているという面もあるようである。

(指導教員：石飛)

安井 貴一

「現代社会におけるマニュアル教育」

この研究ではマニュアル教育の利点・問題点を考え、私がアルバイトホールスタッフとして勤務するレストランでの接客体験の実例を挙げることで、現場で起きた問題点や顧客の意見などを紹介した。そして、接客マニュアル(ハウスルール)が様々な状況に対応できるのかを考えた。

第三章では私以外にも実際現場でマニュアル教育を使って業務を行う従業員に記述式のアンケート調査を行い、マニュアルを使用するものの実際の声を聞くことができた。これらで得たデータを含めて考察した。また考察ではマニュアル(文字)では示すことのできない「暗黙知」を取り上げ、マニュアル教育の必要性と共に暗黙知としての教育の重要性を示した。

結論として、マニュアル教育が働く者にとって効率化を与えてくれることは事実であるが、何もかもをマニュアルに頼り、依存するのではなく、自分で判断が迫られる場面に遭遇してもいいように普段から意識して業務を行うことが大切であるということを主張した。

(指導教員：石飛)

安川 優紀

「発達障害児が小学校学級内で健常児と共に学習するための教育支援

- to be together の社会実現を目指して - 」

本研究は、大学院で「障害児のための生涯学習～to be together の社会実現を目指して～」を研究するためのステップとして、特別支援教育についての知識を深め、現状と課題を知ることにより、「障害児と健常児が共に学ぶことの可能性と限界性」について考察したものである。

ひとりひとりの子どもの教育的ニーズに合わせた教育的支援を行うべきであるという視点に立って、文献を読んだり、養護学校の先生にインタビューを行ったりして、研究を進めた。障害児は、自閉症の子どもを対象とした。

研究の結果、障害児が小学校学級内で健常児と共に学習するためには、教師、保護者、生徒など、周りの理解が何より大切なことが分かった。共に学ぶことは、障害児にとっても、健常児にとっても、プラスになる。

一方で、障害児の学習能力が10歳前後で伸び悩む事実は、これからの大きな課題である。

(指導教員：今西)

渡辺 郁久乃

「中学生と読書」

近年、情報社会の中で読書は後回しにされ、手軽ですぐに情報を得られるものが優先されている。しかし、中学生の思春期、反抗期こそ、読書ならではの経験や感動を味わってもらいたい。そこで、中学生の読書に対する意識や現状、今後の課題を朝の読書活動との関連について研究を行った。

しかし、大きな原因とされてきた部活動や通塾による多忙は、直接的な原因ではないようである。また、読書は好きだが読書習慣がついていない、好きだが読書を苦痛に感じる、という矛盾した回答も目立った。しかし、一度でも心に残るような本に出会っている生徒もおり、それは大きな財産といえよう。

結論として、現在の中学生は、今までに読んだ本の量はあまり多くない。よって、読書の楽しみや感動を味わった回数も少ない。また、他人の目やイメージというものにも敏感になる時期だ。そこで、読書に対するイメージを改善し、好みが大きく分かれるものだからこそ、細やかな周囲からの働きかけが必要だと考える。そして、心に残るような本に沢山出会い、多くの経験を積むことが望まれる。

(指導教員：岡田)

長田 武士

「芸術、文化の発展と育成を通じた地域創造」

近年、商店街の衰退や古い家屋の老朽化、観光地としての再開発などから、全国でまちづくり、まちおこしが盛んに行われている。そんな中、自身が2005年に奈良町に出かけた際に見た、古くから残る町屋を改装してカフェやギャラリースペースとして使った、木造家屋の並ぶ町並みを見て魅力を感じるのと同時に、これらと同じように新しい文化による、地域活性化への可能性を多く感じたことがきっかけである。

研究の対象として、奈良市の奈良町ときたまち、大阪市は上町台地と呼ばれる地域のカフェや公民館、寺社仏閣を使ったアートイベントや、その土地が持つ歴史的、文化的資源と、その魅力を紹介した。また実際に町おこしをされている方々や、奈良町でカフェを経営されている方、カフェで展示を催されているアーティストへ、お話を伺いつつ研究を進めた。

結論として、今後の地域活性化のための必要不可欠な町の要素に、町の景観に対する地域住民の意識の向上と、様々な形で多くの文化や思考が存在し、共有のなされる寛容性のある土壌基盤のある町であることが重要であると考えた。

(指導教員：石飛)